

# じんけん

JINKEN  
第140号  
(通巻 267号)  
2021年7月5日発行

## INDEX

### 特集1

#### 特別シリーズ

「はやくみんなに会いたい!」 その4

～ 新型コロナウイルス感染拡大防止対策と子どもたち ～ ..... 6

### 特集2

#### What'sじんけん

共に生きる社会をめざして その2 ..... 8

第34回通常総会の開催 ..... 2

こどものまなざし ..... 3

「新型コロナウイルスによる差別問題」

宇佐市 高等学校3年 立石真夕佳さん

2020年度色覚検査実施調査から見る課題 ..... 4

ちゃみちゃん & じょんくん ..... 9

「母、反省す」の巻

いまさら聞けない…。いや、聞いていいんです!! ..... 10

「水平社宣言」パート2

INFORMATION ..... 12

「知っていますか? 就学支援のための制度2021」  
について



公益社団法人

大分県人権・部落差別解消教育研究協議会

大分県大分市大字下郡496-38 大分県教育会館内  
TEL: 097-556-1012 FAX: 097-556-0864

URL <http://kjkkoita.jp>  
E-mail [hello@kjkkoita.jp](mailto:hello@kjkkoita.jp)



◀大分県人教の  
ホームページは  
こちら

## 第34回通常総会の開催



5月25日(火)に、大分県教育会館多目的ホールにて「第34回大分県人教通常総会」を開催しました。昨年に引き続き、感染症拡大防止対策のため表決権者のみの参加をお願いしました。ちょうど感染者数が増加傾向にあるような時期でしたので、全ての表決権者は参加できませんでしたが、県内各地より25人(全31人)の参加がありました。

総会の中では、事前開催の理事会で質問が出ていた、高校入学時の面接を中心とした進路保障の取り組みや、「ニュースじんけん」の記事が全人教刊行誌である「であい」に掲載されたこと等を中心に、昨年度の事業報告を行いました。また、昨年度延期とした「ヒューライツフォーラム竹田大会」を今年度開催していく等、今年度の事業計画も承認されました。

## 2021年度(公社)大分県人権・部落差別解消教育研究協議会 理事・幹事一覧

会 長	後藤 哲郎	大分県小・中学校長会	理 事	和田 俊二	大分県高等学校PTA連合会
副会長	河野 仁彦	大分県立学校長協会		清松 督雄	大分県国公立幼稚園・こども園PTA連合会
副会長	下田 博	大分県市町村教育長協議会		池田 貴士	大分県保育連合会
理 事	玉衛 隆見	大分県市長会・大分県町村会		吉田百合子	大分県児童養護施設協議会
	神宮 浩如	大分県商工会連合会		児玉 洋司	大分県私立中学高等学校校長会
	宮崎 哲哉	大分県商工会議所連合会		柴田 孝江	大分県内小中学校教員
	麻生 慎一	大分県農業協同組合中央会	宮瀬 雅士	大分県立学校長協会	
	山田 弘樹	大分県PTA連合会	監 事	甲斐 邦裕	九州労働金庫大分県本部

## 大分県人教 会長あいさつ

後藤 哲郎

上記通常総会において、会長に選任された後藤と申します。どうぞよろしくお願いたします。皆様方におかれましては常日頃から、人権教育並びに部落差別の解消を推進されるとともに、当研究協議会の取組にご理解とご協力をいただき厚く感謝申し上げます。

さて、人権問題はある意味では人類の歴史そのものかもしれません。世界中で人種・民族差別等様々な差別が発生し、今なお続いていることはご承知のとおりです。近代を迎え、こうした不合理なことに真正面から立ち向かうリーダーが何人も現れ、力強いメッセージを発してこられました。多くの人間がそれに賛同し差別をなくす取組を広げてきたにも関わらず、残念ながら今もなお多くの差別は残り、新たな問題も起こっています。

なぜ根絶できないのか。偏見や差別は、私たちの心の奥底にある心の働きと大きく関わっているからだと考えざるを得ないのです。そうであるなら、常に私たちは、それらを解消するという目標を掲げ、教育や社会の諸活動の場で、差別に真正面から向き合い、それぞれが知恵を絞り、工夫を凝らしながら進み続けていく必要があります。

このことを会員の皆様と改めて共有し、県人教は「差別の現実から深く学び」ながら、学校教育と社会教育をつなげ、「人権のまちづくり」をめざした取組を進めてまいります。



# こどものまなざし

このコーナーでは、今年度の人権作文集「ひかり」に掲載された作品を紹介していきます。子どもたちが日常の生活の中で考えたこと、感じたことなどにふれ、子どもたちの姿から学んでいきたいと思えます。

## 新型コロナウイルスによる差別問題 ～一部抜粋～

去年の二月頃、私たちは、当時一番感染者が多かった北海道へ修学旅行に行きました。感染対策を各々がしっかり行ったため、全員健康なまま、学校へ戻ってくることができました。しかし、高校付近の人たちからすれ違いざまに距離を取られるなどといったことがありました。

～中略～

私は、コロナ差別が生まれた背景には、「正しい知識を持っていないこと」があると思います。恐れるべきはウイルスであって、人ではないということ、一人ひとりが理解することが大切で、それがコロナ差別をなくす第一歩になると考えます。

～中略～

私は将来、看護師になるために、日々の学習に取り組んでいます。私が看護師として働くときも、また違う感染症など、危険が多くあると思います。私も現在、コロナウイルスと闘いながら医療を支える看護師のように、強い看護師になりたいです。

人権作文集ひかり2021【第33集】

宇佐市 高等学校3年 立石真夕佳さんの作品より

立石さんの文章からは、「距離を取られるなど」いやな思いをしたこと、そして将来における「違う感染症」への不安が読み取れます。しかし最後の一文からは、看護師として働くことへの大きな志と、今、現場で必死になって命を支えている看護師への尊敬の念を感じます。それは、正しい知識は差別をなくすことにつながる、さらには命を守ることにつながると学んできたからでしょう。

みなさんのまわりには、「日常生活を取り戻す切り札はワクチン接種しかない」というような話が広がってはいないでしょうか。しかし現実には、ワクチン接種ができない人、不安に思っている人、迷っている人、積極的に接種する人…さまざまです。「恐れるべきはウイルスであって、人ではない」。改めて心にとめておきたい一言です。



# 2020年度色覚検査実施調査から見る課題

2021年3月

県人教では、2016年度から毎年色覚検査実施調査をしています。調査目的は「色覚検査の実施状況並びに色覚検査の事後指導等の実態を把握して、人権教育の課題を明らかにし、その教育課題克服のための資料とする。」ということです。文部科学省通知により色覚検査が復活し、その検査前後でどのような教育実践がなされ、教職員、児童生徒、保護者、地域等にどのような課題があるのか、とりわけ、下記の課題にどう対処しているかに注目して分析を行いました。紙面の都合上、詳細分析については、各職場で購入されている県人教発行の『子どもたちに確かな未来を2021』（P50～55）をご参照をお願いします。

- ・文科省通知「色覚検査を周知し、希望者に実施」の後に、色覚検査の実施状況がどう変化しているか
- ・希望者に対する色覚検査後に、対象生徒へ助言はできているのか
- ・職員の色覚問題に対する認識はどうか
- ・『はじめて色覚にであう本』『検査のまえによむ色覚の本』の活用はどうか

## 調査結果についての考察

質問4「検査して良かったことはあるか？」では高校で21.5%（前年19.7%）が「良かった」と答え、具体的には「特性に気づいた」「不安が軽減した」「色の困りがわかり、配慮できる」等が多くありました。しかし、「特性を理解した上で進路選択できた」と言う場合、検査結果が本人の希望進路を断念させる方向であれば、差別選別・偏見容認に通じないか検討すべきです。進路希望先への問い合わせも必要です。

質問6『「少数色覚の疑いのある」児童生徒への学校側の事後指導はどうしているか？』については「何もしていない」が義務制で3.1%（前年3.3%）、高校で7.7%（前年7.0%）。「児童生徒や保護者にアドバイス」は義務制で1.7%（前年3.1%）、高校で18.5%（前年21.1%）となっています。また、事後指導の内容については義務制では「学習面や生活面について」が合わせて2.5%（前年5.3%）、高校では26.1%（前年15.5%）でした。高校の場合「進路・職業選択に関して」が12.3%（前年16.9%）、「少数色覚について説明」が12.3%（前年14.1%）でした。依然として「少数色覚の疑いのある児童生徒に、適切なアドバイスできる体制」にはほど遠い感じがします。

質問10のⅡ『「検査のまえによむ色覚の本」（しきかく学習カラーメイト発行）を各中学校・高等学校・高等部に15冊、『検査のまえによむ色覚の本 利用の手引き』1冊を配布しています。その扱いはどうか？』は、「何らかの活用」義務制で10.5%（前年11.0%）、高校で10.8%（前年14.1%）でした。その他では、「図書館に並べる」、「保健室に掲示して希望者に」等がありました。単に職員室・保健室に「保管」の場合、利用されにくいと思われます。

質問13「就職や資格取得で、色覚の制限を設けている業種があることをどう思うか（複数回答可）」については、「法や安全対策上やむを得ない」が義務制では18.4%（前年23.4%）、高校で23.1%（前年31%）でした。この考えは「少数色覚者の運転では色判別ができないために危険である」という1875年のスウェーデンにおける「運転手の信号見誤りで蒸気機関車の衝突を起こしたという誤解」に基づいていると思われます。

「必要な色判別ができるか検査すべき」が小中で39.4%（前年43.3%）、高校で40.0%（前年38.0%）でした。「職業制限より、少数色覚へのバリアフリー実施」が最も多く、小中で72.5%（前年71.9%）、高校で63.10%（前年69%）でした。

2017年9月に日本遺伝学会は「遺伝情報の多様性が一人ひとり違う特徴となるという基本的な考え方で、色の見え方は人によって多様だ」という世界的な認識から「色覚異常」や「色盲」は「色覚多様性」と表現すべきと提言しました。また、厚生労働省は『公正な採用選考をめざして』と題した冊子の中で「色覚多様性について」という項目を設け、「従業員を雇い入れる際には、『色覚異常は不可』などの求人条件をつけるのではなく、色を使う仕事の内容を詳細に記述するようになるとともに、採用選考

時において、色覚検査を含む『健康診断』を行うことについては、職務内容との関連でその必要性を慎重に検討し、就職差別につながらないように注意してください。」と記載しています。意見記述に「色以外の区分に変えることも考えていくべき」とありましたが、色だけでなく形や模様を加えることで、ユニバーサル化できます。わたしたちはこれらの趣旨に沿った捉え直しをする必要があります。

#### 質問14「学校内外色覚検査への意見」より

- ・色覚検査は遺伝子検査ととらえているので学校での実施でなく眼科につなぐべき。(多数)
- ・希望者への色覚検査なので、見え方の違いに気づいていない保護者、児童生徒がいるのではないか
- ・眼科医によっても診断や説明が異なるようなので児童生徒が自己理解に困るのではないか。

「遺伝子検査なので学校で行うべきではない」という声には一理あります。しかし、遺伝子検査に限らず、医療現場ではない学校で「診断」すること自体が問題です。しかも、石原式検査だけで確定診断はできないことをわたしたちは確認しておかなければなりません。

2021年2月13日第3回カラーメイトの集い(オンライン)の講師の高柳泰世さん(眼科医)が「1974年実施データ(小学校4年生の男子16,903人、女子16,028人が対象)」を用いて、石原式検査表の誤読者をパネルD15より精密な検査機アノマロスコープで診断すると男子は7.19%が正常者、女子では68.24%が正常者という結果が出ていることを説明しました。確定診断でない診断結果をもとに子どもたちの進路指導をしてはいけないことを共通理解しておく必要があります。

## 色覚検査実施調査結果の考察からめざす方向性

色覚検査が2014年に「復活」して以降、「少数色覚の疑いのある子どもや親」または「少数色覚と診断をされた子どもや保護者」は、どこに頼ればいいのか不安をかかえたままです。男性の約20人に1人、女性の約500人に1人は少数色覚であるにもかかわらず、検査結果をどのように少数色覚者に伝え、助言していくのかについての研修は不十分です。

2020年度、全国人権教育研究協議会の要請行動の一環で10月9日に厚生労働省に大分県人教からも参加し、色覚学習カラーメイトの資料を添えて次の趣旨で要請しました。

就職試験の際に実施する色覚検査により、筆記試験等において「合格」と判定された少数色覚者(「色覚異常者」)が「不適」と指導される場合があり、憲法が保障した職業選択の自由を脅かすことにつながっている。それぞれの職種の『具体的な色覚検査方法と判定、合否基準をだれもがわかるように明示』が必要である。航空関係、船舶関係の色覚検査では、石原式で不適合の疑いが出た場合、より精度のあるパネルD15テストで再検査するようになっている。今の段階ではより精度の高いパネルD15テストで判断をすべき。

と、石原式色覚検査だけで合否判断しないよう要請しました。消防庁調査(2018)によると採用試験における色覚検査等の実施状況(母数732)は、検査(石原色覚検査表等。診断書提出含む)実施376本部(51.4%)で、運転免許の有無を確認96本部(13.1%)という状況です。色覚検査をしない消防署も半数あるのです。

また、文部科学省には要請文の中で、

どの学校においても進路指導は、発達段階に応じ、年間計画等にしながら行われているものであり、その中で、少数色覚(「色覚異常」)のみを取り上げて「進路に制限があることを伝える」ことは有意義とは思えません。小学校、特に低学年で伝えることが子どもたちや保護者にとって有意義かどうかを再検討していただきたいと思います。色覚多様性について正しい理解の促進を図ることが優先だと考えます。

と、色覚多様性について正しい理解を深める資料提供をお願いしました。

わたしたちは医療分野とも連携して、進路保障という観点で、色覚問題を考えていき、不安や悩みを持っている子どもや保護者のよき理解者でありたいと考えます。

2020年12月。イギリス・ロシア・アメリカ・カナダ…。様々な国で新型コロナウイルスに対するワクチン接種が始まりました。メディアでは、イスラエルの接種率の高さやイギリスで導入された「COVIDパスポート」を持っている国民への優遇政策などが報道されてきました。

日本でも、医療従事者や高齢者に対してのワクチン接種が2021年2月から始まりました。加えて、県人教会員の多くを占めている教職員への接種が始まろうとしています。学校によっては接種するかどうかの希望調査



接種する

したくないけど接種する

家族が接触者となり、2日間の自宅待機……。自分が媒体になってしまったのでは…という不安が。接種の機会があれば受けようと思っています。

自分が罹患して家族や職場の方々、子どもたちに病気をうつしたくないから接種します。でも、副反応はイヤです。

80才を超える母よりも先に接種するかもしれないことに戸惑っています。

子どもたちの健康を守るのはもちろん、医療に関わる多くの方にこれ以上の負担をかけたくない。

接種を終えました。安堵感でいっぱいです。感染しないではなく、重症化しづらくなるので、まだ受けていない方にも積極的に勧めたいです。

家族がすでに接種して大丈夫で、自分も健康状態に不安がないので打つつもりです。

医療従事者である娘が義務的に接種しているのに、万が一にも私が感染してしまっはと悪い接種を決めました。

2回目の副反応が心配。集団で受ける際は、副反応の出た人が一斉に休むと職場がどうなるか不安。

新型コロナウイルスの終息を願うばかりに、どうしてもワクチン接種が「切り札」であるような情報が私たちの周りには多く広がってきています。厚労省はワクチン接種についてのお知らせの中でも、「**接種を強制しないこと**」「**接種をしていない人に差別的な扱いをしないこと**」を明確に打ち出し、部落差別の解消に向けて学んだ「差別は当事者の責任ではなく、周りの人間のこころの中にある」ことを訴えながら、あくまでも希望する人に接種の機会を保障しようとしています。大分県も「『マスク非着用』や『ワクチン未接種』を理由とした差別も許されません」と、今回のワクチン接種をはじめとする新型コロナウイルスの感染にかかわる全ての差別

## ～ 新型コロナウイルス感染拡大防止対策と子どもたち ～

も始まり、「接種する」「接種しない」の2択ではあるものの、その結論に至るまでに多くの悩みや葛藤があるようです。

子どもたちの姿をシリーズで紹介してきましたが、今回は「ワクチン接種」に対する教職員だけではなく行政関係者やすでに接種を終えた会員の声を紹介していきます。

職員の名簿を貼り出し、○×を書き込みました。  
○が多かったので×をつけづらかったです。

非加熱血液凝固因子製剤によるHIV問題、ハンセン病の治療問題。  
過去の日本政府の対応を考えると、ワクチンの有効性と安全性を信用することができない。

接種を希望しない私は白い目で見られるだろうなあ。

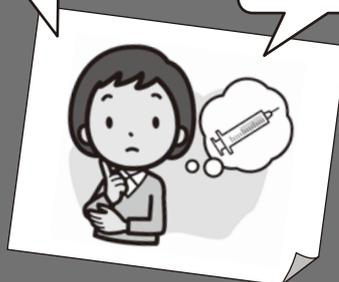
新型コロナウイルスや変異株に感染するのは嫌だけど、安全性や副反応が不安で接種は受けません。

日本製のワクチンを打ちたいから、それまでは打たない。

先生から「妊娠8ヶ月を過ぎればアナフィラキシーショックが起きても胎児は育つ。」と助言いただいたので8ヶ月までは打ちません。でも、8ヶ月を迎えるまでにその後打つかどうか、もう一度家族で話し合います。

接種しない

接種したいけどできない



「ワクチン打ってない先生がいる」と知られたとき、果たして正常な精神状態で勤務できるか不安。

アナフィラキシーがあるので、命を懸けてまでワクチンを打ちたくない。  
「打たない」選択をさせてほしい。

打てない私にとっては、いろいろな事情で「接種できない人」も守るために、「打てる体の人」が受けられる接種であることをもっと報道してほしい。

が許されないことを訴えています。

今回の調査の中でも、名簿を貼り出して互いの動向を確認しながらの希望調査が行われたケースも報告されましたが、多くのメディアが取り上げている「同調圧力」というものを強く感じる報告も少なくありませんでした。

ワクチンを接種すること、しないこと。どちらの選択も、多様な立場の観点から認め合い、互いの願いを尊重していけるようなまちづくりを進めていきましょう。



# 共に生きる社会をめざして

その2



今回は、教職員になってしばらくして出会ったAさんと向き合った報告がありました。学級担任になると、毎年さまざまな子どもや保護者と出会います。「どのように向き合えば良いのか…。」毎日自分に問いかけながらも「自分らしく向き合うことができれば…」という漠然とした答えをもち、毎日子どもが見せてくれる姿や願いとその答えのギャップに、「このままで良いのだろうか…」とさらに自問自答を繰り返す日々だったことを思い出します。

## 「インクルーシブ」について

今から20年以上前のことになるが、小規模校で20人ほどの4年生を担当した時の話である。クラスには知的に「障害」のあるAさんがいた。言語でのコミュニケーションは全くとれないし、私自身どう対応すればいいのかとても不安なスタートだった。しかし、私はこの年の1年間で「共に生き、共に学ぶ」ことの重要性を、Aさんや周りの子どもたち、保護者の方たちから日々学ばせてもらった。

保育園からずっと一緒に過ごしてきた子どもたちにとって、Aさんは特別な存在でもなく、一緒にいることが“日常”なので、いろんなことを自然とやっている。

ある日の給食で、となりのBさんが、「はい、つけて食べるんよ。」と言いながらパンを一ロサイズにちぎり、ジャムの口を開けてAさんの皿に置き、Aさんがうまく食べられなかったらよごれた手や口をふく。みんなで昼休みにレク活動をする話し合いの時は、「Aさんルール」を決めて、必ず一緒に遊ぶ。授業で私がAさんの配慮を忘れていると、「先生、Aちゃんはこうしたらできるんやない?」と、Aさんがどうすればいいのかアイデアをみんなが考える。家庭訪問に行くと、保護者のみなさんが「Aちゃんのおかげで、うちの子たちはとっても大切な勉強をさせてもらっている。」「Aさんの家の考え方はすごい。」という話をどのご家庭からも聞いた。みんながAさんを大切に思っていることがひしひしと感じられ、「どうすればいいか?」とAさんに対して構えていた自分に気づかされていった。一緒に過ごしてきたから、どうすればいいのか、どんなことができるのかを自然に考え、それが当たり前になっている“日常”が、Aさんも周りの子どもたちも、さらには地域のおともも共に成長させるのだと実感した。

正しいかどうかはわからないが、私はこれこそが「インクルーシブ教育」の原点だと思いながら、今、目の前の子どもたち、保護者と向き合っている。私にできることは微力だが、互いにわかり合える、支え合えるなかまづくりをめざして。

手紙をくださった方は、Aさんやまわりの子どもたちと保護者から向き合い方を学び、インクルーシブな社会のあり方を体感できる貴重な時間を、みんなと共有していたのだと思いました。

「インクルーシブ（教育）」というと、合理的配慮や特別支援教育を連想する方も多いように感じています。しかし、インクルーシブな社会をめざすことは、学校現場が発信する物事ではありません。今回は、そのようなまちづくりを進める中で感じた「社会的な障壁」についての投稿です。

## 「社会的な障壁」

最近、性で悩む子どもたちが抱える社会的な障壁について考えさせられる出来事が2つありました。

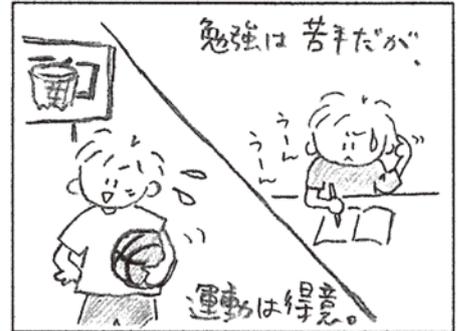
1つは、ニュースでニュージーランド出身の重量挙げローレル・ハバード選手が、トランスジェンダー女性初の五輪出場という話題が取り上げられたことです。私の想像ですが、きっとローレル・ハバード選手は、幾多の分厚い社会的な障壁に立ち向かい、オリンピックという舞台をめざしてきたのではないかと思います。彼女の自分らしく生き抜く姿に、世界中の子どもたちが勇気づけられたのではないのでしょうか。

2つめは、今国会で「LGBT法案」が見送られたことです。まさに、社会的な障壁が存在することを象徴する出来事でした。おとなが勝手な偏見で社会的な障壁を作り出すことは、子どもたちへの負の財産でしかないように感じました。

これからの日本が、ローレル・ハバード選手から夢や希望、勇気をもたらした子どもたちにとって、生きやすい社会になるよう、私に何ができるかな…。とりあえず、何か発信できるように、この原稿を書いています。



ちやみぢん  
じょんけん  
「母、反省す」  
の巻



## 第3回オープン講座のお知らせ

8月3日（火）13:30から県教育会館多目的ホールにて、第3回オープン講座を開きます。熊本から堀正嗣さんを講師に招いて、「子どもの人権から見たインクルーシブ教育」を話していただきます。どなたでも参加できる講座ですので、お友だちを誘って是非ご参加ください。



きくちゃん

# いまさら聞けない…。 いや、聞いていいんです!!



じん犬博士

## 〈第23話 「水平社宣言」 パート2〉

※新型コロナウイルスが影響して、きくちゃんの学校では修学旅行先が県内の観光地となりました。きくちゃんの楽しみの一つは、奈良公園の鹿だったそうですよ。(以下、🐶=じん犬博士、🐵=きくちゃん)

🐵はあ…、まじ残念やわー。奈良公園、楽しみやったのになー。鹿に囲まれたかったわー。

🐶ううむ、こればかりは仕方がないからのお。まだまだ感染は落ち着かんからな。

🐶今はガマンの時！…よなっ。

🐶うむ。きくちゃん、奈良は鹿だけが有名ではないぞ。奈良と言えば「水平社博物館」。西光万吉さんの出身地じゃよ。

🐶あ～っ、そうやった！

🐶来年の3月3日で「水平社創立宣言」100周年なんじゃよ。この宣言は、長い間、差別と迫害によってしいたげられていた被差別部落の人々が、みずからの意志で、奪われた人間性をとりかえそうとしたものであり、全人類の解放をうたう**日本初の人権宣言**なんじゃよ。「**人の世に熟あれ、人間に光あれ**」という結びは実に有名な文言じゃよ。

🐶わかる～。そして、ええっと、ええっと…。詳しく言うと、ええっと。

🐶きくちゃん、こうじゃよ。1870(明治3)年、明治維新政府は、農民や町人が姓(苗字【みょうじ】)を名のることを許し、翌年の1871(明治4)年10月(新暦)、近世社会の最低身分とされた賤民の身分、職業とも平民同様とする、いわゆる「解放令(賤民廃止令)」を發布したんじゃよ。これにより、「穢多(えた)」「非人」などの差別的呼称と身分を廃止して被差別民を「解放」するなどの措置がとられ、少なくとも法律・制度の上では差別

はなくなったはずじゃった。

🐶そうだった！博士、それって「四民平等」のことよな。

🐶そのとおり。きくちゃん、思い出したかい？だが、差別解消のための積極的な政策を実施しなかったために、長く培われてきた差別の慣習や意識と相まって、結婚・就職・教育・居住などにおいて社会的差別を受ける人々が残され、実際のところ、平等は実現しなかったんじゃよ…。

🐶みんなが平等にはなれんかったんよな。

🐶しかしじゃ。こうした中、1922(大正11)年3月3日、3,000人以上の参加者を持って、京都市・岡崎公会堂で部落差別の撤廃とすべての人間の解放を求めて、全国水平社(略称「水平社」)創立大会が開かれたんじゃ。水平社は、封建的身分制度のもとで最下層に位置づけられた人々を中心に形成され、様々な差別を被っていた被差別部落民らが自主的に結成した差別撤廃の運動の組織体なんじゃよ。

🐶差別されよった人の立ち上がりや！

🐶そうじゃ、そのとおり。この水平社創立大会で、大拍手と歓呼のうちに採択されたのが、「綱領」と当時27歳だった西光万吉(さいこうまんきち)が起草した「宣言」(水平社宣言)なんじゃよ。

🐶あーっ、そうそう。西光さんはたしかお坊さんやろ。

🐶そうじゃな。西光さんは、被差別部落にあった浄土真宗本願寺派西光寺の住職の長男として奈良県に生まれ、きびしい差別を幾度となく経験してきたんじゃ。だからこそ、被差別部落民の団結により差別撤廃を進めようと訴え、真の自由・平等とは何かを問いつめ、到達した普遍的な人権思想と

して「人間は互いに尊敬すべきものである」という理念を掲げたんじゃないよ。こうした部落民自身による解放運動は、瞬く間に全国へと広がり、各地で部落差別撤廃に向けた活発な活動を行っていったのじゃが、1942（昭和17）年、戦時体制のもとで解散を余儀なくされたというわけなんじゃよ。

- ④でも、水平社はなくなったわけじゃなかった。
- ⑤そのとおり。戦後、部落解放全国委員会として再発足し、1955（昭和30）年部落解放同盟に改称、現在に至っており、水平社宣言の精神は、幅広く人権問題に取り組む出発点となっておるんじゃ。
- ⑥そういえば、博士。真っ黒の中に、赤いトゲトゲの輪っかみたいなのが二つ重なったような旗を見たことがあるんやけど、あれって何やったけ？
- ⑦きくちゃん、その旗は**荊冠旗**じゃよ。赤い荊冠（けいこん＝いばらの冠。イエスが十字架にかけられた時かぶせられたことから、受難をたとえる）は、水平社宣言にある「**殉教者がその荊冠を祝福され**

るときがきた」という言葉に象徴されているように、被差別の苦闘の歴史の中で生き抜いてきた人々の誇りを意味し、黒い背景は差別のある厳しい世の中を意味していると言われておるんじゃよ。そして、いばらの内側に向けたトゲは、自らの生き方に人権を侵害するものはないかと戒めておるんじゃ。全体として、差別を跳ね返し、被差別者として誇りを持って生きていくという理想を表現しておるんじゃ。

- ⑧スゴイ、スゴイ！ あ～、何回聞いてもワクワクすっぞ！
- ⑨ほっほっほ。どこかで聞いたフレーズじゃな。さて、きくちゃん、もうそろそろ帰らんと、おうちの人心配するんじゃないかい？
- ⑩うん、新型ウイルスが落ち着いたら、わたし、奈良に行く！ そして、奈良公園だけじゃなくて、西光寺や水平社博物館にも行ってみたいな。あ！ やばい、もうこんな時間！博士、またね～！



